

波濤は歌わない 上 大原富枝

中央公論社

波濤は歌わない 上 大原富枝

中央公論社

波濤は歌わない 上

一三五〇円

昭和五十三年七月十五日印刷
昭和五十三年七月二十五日発行

著 者 大原富枝

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七八

波^な濤^み
は歌わ
ない
上

秋 祭 り

雨あがりの城下町は、うるんでいるような重い空気のなかで、築地の白さが灰色をおびてにじんでいる。

鷹匠町という町は、旧藩主の侯爵家の広大な邸宅もある屋敷町で、人通りも少なくいつもひっそりしている。築地からんで這っている蔦が紅葉して、重く古めかしいこの町なかに、思いがけない媚めかしさを点じている。

志野は手織木綿の縞の袴に、綿縮めんしゆくと呼ぶ木綿を縮緬ちぢみの風合ふうあいに織った花模様の帯をしめて、そういう他所よそゆきの恰好かっこうをしている娘の心弾みで歩いていた。

志野の通っているお針の師匠の家は、その町はずれにあった。志野はもう一年あまりも、毎日ではなかったがこの通りを通っている。城下町のたたずまいの濃い、風格のあるこの町を歩いているとき、志野はいつもよりしゃんとして、それでいて娘らしくふっくらした優しい心持になっている。何を期待しているというのでもないのに、何かを待つ、夢見勝ちな心の姿勢になっ

た。

志野の行手の少し先の方で、築地の潜り門が開いて一人の瘦せた西洋婦人がひょいと路上に現れた。その後から背の高い青年がつづいて出て来て、二人は向き合って立ったと思うと、背伸びした婦人は青年の肩につかまり、両方の頬に口吻けた。背を少しかがめて青年はおとなしくそれを受け、自分も返した。

彼はそのまま大股に歩いて向うの角を曲って行つたし、婦人の方もとの潜り門の中に消えてしまった。

もう人影もない路上に、志野はしかし足を止めたままじっとしていた。歩き出せないのだ。美少女というよりも美少年の感じのする、高く通った鼻筋のひきしまった顔を、少し蒼ずませて立っている。胸の動悸が自分にわかった。志野は西洋人のする接吻というものを初めて見た。いま見たそれが、恋人同士のするそれではなく、親しい同士や家族のあいだの普通の挨拶だということ、漠然とだが志野にもわかった。

西洋人にそういう習慣のあることを、志野はどこかで聞いて知っていた、と思う。あるいは何かの本で読んだか、お針のお師匠さん^{しやうせん}のところでは話が出たのか……。多分そうであつたらう。志野の家庭では、まちがってもそんな話のするような雰囲気はない。志野は周りを見廻してやっと歩きだし、その時分になって少し顔を赧らめている。

その家の前を通り過ぎながら、志野は門のなかをそつと覗きこんだ。ちょうどそのときオルガンのもの憂いような低い音が流れだして来た。あれは讚美歌だろうか、と地を這うように流れて

くる振幅の大きな楽器の音に耳を澄した。日本の歌のメロディとも、学校の唱歌ともちがう、はろばろと雲が流れてゆくのを仰ぐような、娘心を誘う緩やかなやさしい旋律を持っている。

ここ四、五年のあいだに、この城下町にもいくつかキリスト教会が出来て、外人の影がちらちらするようになった。この家も、二、三年前からここに住みついているアメリカ婦人のダウドさんがはじめた「精華女学会」であった。城下町ではキリスト教のことを耶穌と呼んでいた。女学会では何人かの耶穌の娘たちがダウドさんといっしょに暮して、耶穌の歌をうたい、アーメンと祈りをささげ、英語の勉強をし、洋服の裁ち方、縫い方を教えられているのだという。

同じ町内のことなので、お針のお師匠さんは女学会のダウドさんの噂をすることがある。志野はだから多少のことは知っている。牛の乳を毎日「牧牛社」から一升も配達させ、飲むだけではなく、それを煮て野菜を入れた吸いもののだの、煮つめて豆腐のような料理を作ったりする、という。志野は吐気のしそうなをやっと我慢した。何としても牛乳が志野には飲めないのである。

しかし、牛乳料理に吐気がすること、女学会というものや、アーニー・ダウドと呼ばれるアメリカ婦人に、志野が漠然と感じている憧れとは、べつに矛盾するわけではなかった。

お師匠さんの家では広座敷に二列に並んだ裁物台の前に、友達がもう縫物を拵げている。それほど華やいだ色彩の反物はないし、娘たちも地味な緋や縞物の木綿の着物をつましく着ていて、彩りといえば半襟の紫や帯の紅い花模様だけであったが、娘たちが十人ほど集まっているこの部屋はやはり賑かに華やいでいた。

「おそくなりました」

と志野は手をついて挨拶した。お師匠さんは正の座に娘たちと向き合って、やはり裁物台の前に坐っている。後に坐ったままで使えるように、低い黒板が据えてあった。そこに袖底の丸みや襷ふくの標しるしつけの図解が描かれている。

包みをほどくとき、縫物の上に載せてある緑色っぽい小型本を志野はそっと膝の横にすべらせた。右側の裁物台に並んで坐っている武市織江が下眼づかいにそれを見て、そっと頷いた。眼のなかに微笑が揺れている。志野も小さく笑みを返した。

徳富蘆花の『自然と人生』を貸してくれたのは織江であった。水辺の草の描かれている緑色の愛らしい小型本を、志野は汚さないように表紙にカヴァをかけて繰返し読んだ。どうしても憶えておきたい文章は筆で写しとったりもした。

志野は自分もこの本を欲しいな、と思う。しかし、彼女が本を読むことを父も母もいい顔をしていない。お前、遊んでいないでちょっとこれを……とすぐいわれる。本を読んでいるというと、女の子が手を遊ばせていて……といわれるのであった。女の手はひとときも休んでいるべきではないのだ、という考えが極く普通に通っている。

だから志野は織江に借りた本を、米を搗く唐臼からうすのきねを踏みながら読んだ。唐臼は納屋の裏の軒下に設けてあった。大きな深い石臼の中のきねは、岩乗な台の先についている。台は真中の部分が支えられていて、その上に上った志野が、前後に踏み開いた足の後足に力を入れると先端のきねは高く上り、前足に重みをかけるときねは下りて臼のなかの米や麦を搗く。

志野は軒から吊してある紐に左手を通し、右手で本を持って読んだ。機械的に足を交互に踏ん

でいい。本が読めるということで志野は米搗ぎが好きになった。夜、寝てから脚がだるくて眠れないような苦しさがなければ、一日中米を搗いていてもよかった。

本を読むことの愉しさに志野が人知れずこめている思いは、その本を選び、買った人の上にある。織江の貸してくれる本はすべて彼女の兄の直幹^{なおもと}が、東京から買って持ち帰ってくるものであった。

彼がその本を、東京の大きな書店の高い書架から抜きだしている姿が、いつも志野の心に浮んでいる。緋の着物に、折目もなくなった縞の袴を面倒臭そうに腰にまといっている彼が、大きな身体の肩をすぼめるようにして拾い読みをしている。この本も、あの本も、あの方がお手にした本のひとつが選んだ本、という甘やかな思いが、織江に本を借りるときの志野の胸にいつもあった。直幹は東京の帝国大学にいて、故里の家には休暇のときしか帰っては来ない。そのときたまの休暇に、織江を訪ねて行って彼に逢った何度かの記憶を、志野は一回一回指を折るように大切に抱いている。それはじつに他愛のないもので、一度などは、彼は大きな身体でずしんと、大切に抱いている。それはじつに他愛のないもので、一度などは、彼は大きな身体でずしんと、大切に抱いている。

志野が織江と話している縁側を、ただ通りすぎていったというだけのことであったりした。

「まあ、兄さんいうたら、家が揺らぐわ……」

織江が咎めるようにいうと、彼は振返って、

「なんだ？」

と脅すように眼を剥いた。志野が驚いて見あげている眼に逢うと、

「普通に歩いただけじゃないか……」

ふと、てれたように笑顔になって廊下を折れていった。

「ま、威張って……」

織江は首をすくめるようにしていい、志野と眼を見合せて笑ったが、志野はほのかに赧らんでいた。

この土地の旧家で地主でもある武市の家は、父親がもう長く市会議員をしている。板垣退助の立志社系で海南自由党に属していて、もうずっと前に亡くなった植木枝盛や、いまは病臥中の片岡健吉などの名が、ここでは生きている人のように先生という尊称をつけて毎日のように口にされている。面倒見もいいので邸のなかは人の出入りが多く、少し雑駁で親しみ易い賑やかな空気である。

古い築地の囲みのなかに、一隅には孟宗竹や寒竹の小藪もあったり、季節には黄色い春菊や菜種や、白い大根の花も咲く野菜畑もあったりする。取り澄したところのないだっ広い屋敷も、暢びやかな雰囲気であった。

子供たちの部屋は、書生部屋や住込みの植木屋夫婦などの住居といっしょに、竹藪や菜園に囲まれている。この夏の七夕祭りのとき、志野が織江に頼まれていた赤く熟した江戸ほおずきを届けにゆくと、織江の部屋の縁側には若い篠竹が二本立てられて、ま新しいメ縄が張られていた。

織江と、そして夏休みに帰郷中の直幹が一つの硯を中にして縁側に坐り、篠竹に結びつける短冊に歌を書いていた。織江が稚いながらよく習わせられた跡のわかる御家流で、

ありまやまいなのさはら風吹けばいでそよひとを忘れやはする

などと書いている傍で、白緋の直幹はあぐらをかいて、毛脛にまつわる藪蚊をびしゃびしゃ平手で叩きながら、

春みじかし何に不滅のいのちぞとちからある乳^ちを手^てにさぐらせぬ

と、太い力のこもった筆で書き流していた。

「いや、兄さんは。またそんないまふうの歌を書きなぐって……」

「お前こそ、そんなきいたふうな歌書いて、わけがわかってるのか」

兄妹の口いさかいの傍で、志野は額ぎわをうっすら赧らめて直幹の歌を読んでいた。志野はその歌といっしょに、

乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬこなる花の紅^{くれなゐ}ぞ濃き

という歌も知っている。しかしそれらの歌の真の意味を、彼女が知っていたわけではなかった。大層評判の高い晶子のそれらの歌を思っ、志野が顔を赧らめたのは、彼女の自覚しない嫉妬であった。

東京という、直幹のいる世界、直幹が生き甲斐を感じている世界であって、自分には決して手の届かない世界への、どうしようもない嫉妬であった。志野はしかし、それを十分わかっているわけではなかった。だからこそ志野は、あるとき直幹の見せた一つの表情を、宝物のように後生大事に抱いていたのである。

そのときはお茶の稽古からの帰りで、志野は鏡川に沿った土手道を、友達といっしょに歩いていた。唐人町に近いあたりの曲り角で、一人ですたすた歩いてくる青年と出会った。それが直幹とわかったとき、志野は思いがけなかったの足を止め、小さく口を開いた無心な表情で彼を眺めた。彼が帰郷していることを知らなかったし、休暇という時期でもなかった。信じられないことであった。あまりにまじまじと眺められて、直幹の方が眼の周りから額ぎわへかけてぱっと赭らんだ。志野が激しい羞恥に身が竦む心地になったのは、そのあとである。

友達が、忙しく二人を見比べる顔になった。すれちがうと友達がすぐ訊いた。

「あのひと、だれ？」

「友達のお兄さんよ」

「あのひと、あなたを好きみたい……」

ついいってしまった、というふうに友達はそういい、途中から自分のはしたなさに気づいてわれながら驚いた顔になった。志野もいわれた事柄よりも、それをいった友達の慎みのなさに、あつと思つた。

二人は顔を見合せて立っていた。お互いに士族の娘できびしく育てられている。言葉の意味が

志野を強く打ったのは、そのあとであった。

「嘘よ、うそ、うそ！」

真顔で、まるで侮辱を受けでもしたように志野は激しく友達の言葉を否定した。身体ごと首を強く振っている。

「ごめん、ごめんね、志野ちゃん」

友達が詫びたのは、内容ではなく、それをいった自分の嗜みのなさについてであったろう。志野の真剣さに驚いたのである。

志野はそのときはもう、いわれたことの意味に気づいていて、羞恥と嬉しさが胸いっぱいになっていた。こんな他愛もないことを、志野がその後長く忘れなかったと知ったら、友達の方こそ驚き入ったにちがいない。それは志野の心のなかにだけしまわれていた。それを口にした友達自身は、すっかり忘れてしまった後までも……。

織江はその日、志野を送ってゆくといって肯かなかった。二人の家はまったく反対側にあったので、織江の側に何か是非話したいことがあるのだ、と志野にはわかった。二人は侯爵邸の古い築地に沿った小さい坂道を上って鏡川の土手に出た。

志野の家は城下町とはこの川によって隔てられている。志野が織江に対して、自分を何とはなしに田舎者と卑下したくなるのは、市内にある彼女の家と、川向うの村にある自分の家の雰囲気の違いでもあった。

織江は、志野と同じように上背のある身体に、メリンスの帯を下目にゆったりと締めている。

「なぜ、今日あんたについて来たか、わかる？」

いつになく黙りこんで歩いていた織江がそういった。

「わかるわ、これでしょう」

志野は胸に抱いている包みを軽く持ち上げて見せた。そのなかに『自然と人生』と引き換えに借りた同じ作者の『不如帰』^{ほととぎす}がはいっている。その小説は、ずっと前から彼女たちが読みたがっていたもので、織江が兄にせがんで、やっとこのほど送られて来たものであった。

織江は風邪心地だと仮病をつかって、二、三日、蒲団を被ってこの小説を読み耽った。志野にはとても許されるはずのないことだが、織江の家庭ではそれが大して無理もなく通る自由さというか、ある意味ではだらしないさともいえる、多忙な両親の眼の行き届かないところがある。

「昨日までこれを繰返し、繰返し読んだの、それで、昨夜はわたしまんじりともせず考えたのよ」
織江は腫れぼったい眼をしていた。

口数の少ない娘であったから志野は黙って、相手の話しだすのを待っていた。織江は志野よりも一つ年下であったが、頭脳の鋭い、自分の意見をうまく話すことのできる娘であった。

「秘密よ、わたし、東京へゆくことにしたの」

織江は口に出してしまってから、今更のように事の重大さに打たれた表情になった。志野があまりにぎょっとした顔をしたせいかも知れない。

織江は、志野の顔の前で小さく手を振った。

「止めたらいや、止めたらいやよ。まあ、『不如帰』を読んで！ あたしを止める気にはならん

はずよ、それ読んだら……」

織江の真剣さに圧迫されて、志野は、

「そう？　じゃ、これ読んでみるわ、すぐにも」

抱えている包みのなかの小説本を、志野はふと爆裂弾か何かのように怖い眼で眺めた。一時も早くそれを読みたいと思う。

「あのね、浪子がいっうの、『あゝ辛い！　辛い！　最早——最早——最早——最早——生れはしませんよ——』って。それを読んでから、止めるのならわたしを止めなさいよ」

織江が、浪子のせりふをせつなそうに実感をこめていった。いつもなら笑ったかも知れないのに、志野の身体のかなかを、いいようのない昂りがそのとき走った。

もう二、三年も前から大層評判の高い『不如帰』がどういう小説なのか、勿論、志野も知っていた。それは新派の芝居にもなつてこの城下町でも上演されたりした。しかし、小説というものが、それらとは全くちがう感動をあたえてくれることも志野はもう知っている。

小学校を卒業しただけの志野は、毎日の新聞や小説を、「勉強する」という気持ちで熱心に読んでいた。彼女の知識は殆どそこから吸収されたものであった。

この春、竣工したばかりの潮江橋の太い欄干に寄つて、二人は立話をしていた。織江が志野を送つてくるときはいつもこの橋の上で別れることになっている。広々とした橋の真中には、やがてこの橋の上を通過して、阪神航路の船の出ている棧橋まで開通するはずの電車の、枕木や、敷設工事のための材料が積みあげてあった。

このように立派な橋が架けられ、電気を使ってひとりで走る電車というものがこの町にも初めて現れるということも、何か若い彼女たちの心を煽るものがあつた。

「東京へいって、織江さん、何をするの？」

「学校へいくの、女学校へはいるのよ、そう決めたの、勉強をするのよ」

「女学校へはいるの？　そう……」

志野は満ち潮で水面が丸くふくれてくる川を見下しながら、胸の動悸が高くなる心地がした。女学校ならこの城下町にも県立女学校が十年も前からあつたし、私立も去年一つ出来ている。しかし織江はこの城下町の女学校はいわず、東京へゆくという。

「明治女学校か、跡見女学校へはいるの」

織江はその決心が動かせないものであることを証明するように、声を潜めていう。直幹は妹に「女学雑誌」をときどき送って来たことがあつて、織江はいまではそれを直接購読している。借りて読む志野も、だから「明治女学校」は知っていたが、それはまぶしすぎる名前であつた。跡見女学校はまた、華族女学校について華やかな上流家庭の子女のゆく女学校のように、志野は思つていた。

女に学問はいらない、というのは一般のことで、志野は女学校に是非ゆきたいとは思わなかつたけれど、お針のお師匠さんのところで織江に本を借りて読むことを覚えてから、本に夢中になっている。女学校へゆけば、本を読んでも誰も叱らないだろうと思う。じっさい志野には、そんな他愛ないことをまじめに考えているところがあつた。